

きららしゅう  
『雲母集』の「新生・序歌」に関する一考察

小 倉 真理子

一、はじめに

『雲母集』は、大正四年八月に阿蘭陀書房より刊行された歌集で、『桐の花』に続く北原白秋の第二歌集である。この『雲母集』は『桐の花』の「哀傷篇」で歌われている松下長平夫人俊子との恋愛と下獄、いわゆる「桐の花」事件以後、保釈金によって釈放された白秋が、長平と離婚した俊子と再会し、神奈川県三崎で新たに結婚生活を始めてからの心境が吐露された歌集として名高いものである。

『雲母集』の構成は、「新生・序歌」から始まり、「流離抄」「三崎新居」「雲母雲」「山海経」「自然静観」「地面と野菜」「深夜抄」「臨海秋景」「法悦三品」「閻魔の反射」「見桃寺抄」と十二の章からなり、「桐の花」事件後、神奈川県三崎における白秋の生活がほぼ再現されるような形になっている。その三崎での生活について、白秋は「雲母集・余言」で次のように述べている。

この約九カ月間の田園生活は、極めて短日月であつたが、私に取つては私の一生涯中最も重要な一転機を劃したものだと思ふ。初めて心霊甦り、新生はより創まつたの

である。

この「余言」で使われている「新生」という語は『雲母集』第一章でも「新生・序歌」として用いられている。こうしたことから、「新生・序歌」の章は、『雲母集』について論ずる時、必ず触れられているといつてよいほど注目されている。本稿においても、また「新生・序歌」について考察を加えたいと思うが、それは特に「新生・序歌」が『雲母集』の序章として大切な位置にあると考えるからである。

第一詩集 『邪宗門』	明42・3	「邪宗門扉銘」「邪宗門秘曲」等
第二詩集 『思ひ出』	明44・6	「わが生ひたち」「序詩」等
第一歌集 『桐の花』	大2・1	「桐の花とカステラ」等
第三詩集 『東京景物 詩及其他』	大2・7	（「東京夜曲」）
短唱集 『真珠抄』	大3・9	巻頭歌等
短唱集 『白金之独菜』	大3・12	「白金之独菜序品」「白金ノ独菜」等

右の表にあげたように、白秋は『雲母集』以前の詩歌集でも作品集の最初に各々の作品集を象徴する詩歌や散文を載せている。『雲母集』にあつてはこれが「新生・序歌」にあたる。実際、『雲母集』を見ても、時間を追う順次的な配列は第二章の「流離抄」から始められており、「新生・序歌」は二章以下とは異なつた位置づけをされている。作品の製作も「新生・序歌」には概ね大正四年八月発表の歌、つまり、『雲母集』刊行とほぼ同時に発表された作品と歌集初出と考えられる作品しか載せられておらず、「新生・序歌」の歌々が『雲母集』刊行に向けて詠まれ、『雲母集』を総体として象徴する位置にあることが明らかである。「新生・序歌」に対する正しい理解は『雲母集』全体を理解する上でも重要であると思われる。

## 二、〈卵〉と〈魚介三品〉

さて、『雲母集』には、五百五十六首の歌が収められているが、「新生・序歌」には僅か十九首の歌が収められているに過ぎない。その構成は〈力〉一首、〈卵〉三首、〈大鴉〉七首、〈犬〉二首、〈魚介三品〉三首、〈穴〉一首、〈薔薇〉一首、〈雲〉一首の計十九首である。『雲母集』全体の歌数からいえば、極めて少ない歌によつて成つている章といえるが、先に述べたように「新生・序歌」についての言及は少なくない。けれども、それらの方向は、概ね画一的だといつてよいのではないかと思う。つまり、新生のための力と意欲で漲つているという見方である。例えば、田谷銳氏は「新生・序歌」にある歌を含めた次の歌々、(a) 煌々と光りて動く山ひとつ押し傾けて来る力はも

(b) 大きな手があらはれて昼深し上から卵をつかみけるかも

(c) 大きな足が地面を踏みつけゆく力あふるる人間の足が右を挙げながら、

力への憧憬、もしくは健康な生活への希求といったものがこれらの作品には見られる。(中略)印象派の絵画を思ふす卵の歌、さらに、岸田劉生の筆触を想起させる足と地面の歌、むしろ明確にすぎるそうした作品も作者の分身ではあるが、その規を越えて及ぼしてゆく力の世界への憧憬が、「煌々と」の歌にはあるように思われる。

と述べておられる。また、岩間正男氏は(a) (b) (c)の歌に次の(d)の歌を加えて、「まさに光明と生命礼讃の新生がここにある」と述べておられる。

(d) 昼渚人し見えねば大鴉はつたりと雌を圧へぬるかも

しかし、このように「新生・序歌」の歌々を向日的で明るい見方でのみ理解してよいものだろうか。例えば、〈卵〉という連作中にある(b)の歌。この歌は「新生・序歌」の代表作として田谷氏、岩間氏も触れておられるとおり、生命力の逞しさを卵をつかむ動作に移したものと見る見方が多くを占めている。

(b)の歌について詳述している恩田逸夫氏も、

「大きな」の歌は(中略)生命力に満ちた表現である。

「大きな手」は、作者が卵を見ているところへ、脇からだれかが手を伸ばしたとしても、作者自身の手と解してもよからう。ともかく光に満ちた田園の昼下りの時刻に宇宙全体を動かしているような神秘的な力の存在を直観し、そ

の生命力のたくましさを、「卵」をつかむ動作に移して表現したのである。

(傍線筆者・以下同様)

と述べておられるし、次に挙げた横田真人氏の解釈もほぼ同じような視点から論じられている。

白秋の書いたとおり、まさに力と輝きの歌で、彼自身跳ね躍った歌いぶりである。通釈をすれば、あたりになにか原始的な野性的な力の気配がただよう、しんとした昼ざかりに、大きな手があらわれて、上からむずと卵をつかみとつた、というところだろう。「昼深し」は、具体的には午後三時ごろのことである。午後三時ごろの光に満ちた田園を動かしているような神秘的な力を直観し、その生命力のたくましさを、卵をつかむ大きな手の動作に表現したものののだ。たしかに『桐の花』とは、ちがう。ぐんと生命力に満ちた表現となっているのである。「大きな」ということには、野性的な力があらわれているのだ。そういえば『雲母集』には、「大」という文字が、実にひんばんに使われている。(中略)こうした原初的な歌が生まれるほど、三崎での白秋の生活は明るかったのである。

確かに「大きな手」、「……つかみけるかも」という表現に着目すれば、横溢する力を表現したものといえるだろう。けれども、それ以上に注意しなければならないのは、連作の題目にも掲げられている〈卵〉の描かれ方なのではないだろうか。この点から、西本秋夫氏は、まず折口信夫が『雲母集細見』で「大きな手があらはれて」の歌は、兎に角も或恐怖を暗示してある」と述べているのに同意して「ある種の恐怖」を読み取りな

がら、さらに「これを三崎における当時の白秋の心境の象徴とまで押しあげてしまう」と述べておられる。

「大きな手があらわれて」という表現が大きな手を持っている人物からの視点ではなく、大きな手を客体として見る側にあることに留意すれば、手の大きさが力強さとは異なる意味合いを含んでいると理解できるのではないだろうか。突然現れた巨大な手は、いかなるものであるかということも、いかなる目的を持っているかということもわからない、不安と恐れに満ちた存在だからである。卵にとつては生命を奪われる危険性すら伴っているといえる。この歌に「ある種の恐怖」を読み取るのは、至極妥当なことであろう。「大きな」という言葉が使われているとしても、ただそれだけで生命力の充実を読み取るのは一面的すぎると知られるだろう。

ただ、西本論のようにこの一首のみを取り上げて「当時の白秋の心境の象徴」だとしてしまうのには少なからず疑問が残る。もちろん、「ある種の恐怖」が白秋のひとつの心境の象徴であることには間違いないだろう。けれども、この歌は一首で独立しているわけではない。〈卵〉と題された三首の中の一首として鑑賞されるべきであろう。あらためて、次に〈卵〉の連作三首を挙げてみよう。

- ① 煌々と光りて深き巢のなかは卵ばかりつまりけるかも
- ② 大きな手があらはれて昼深し上から卵をつかみけるかも

③ かなしきは春画の上どころがれる七面鳥の卵なりけり  
「大きな手があらはれて」と詠まれる②の歌に先立つ①の

歌では、深い巢の中にきらきら光る卵がぎつりとつまつていくというのだから、まさに生命に満ちあふれた状態が歌われているということになる。何といつても、卵が巢のなかにあるのは、卵にとつて一番安定し、充実した状態だからである。この一首が独立して詠まれていたならば、確かに生命礼讃の歌と言えるだろう。が、これを引き継ぐ第二首では、巨大な手によっていずれとも知れない所に移される恐怖が歌われ、第二首を承けた第三首、③の歌では、「かなしきは春画の上にごろがれる七面鳥の卵なりけり」と、第一首からの卵が七面鳥の卵であったということと同時に、その七面鳥の卵をかなしいものと詠んでいることが知られる。巢の中から大きな手によって剝奪され、今、安心できる場所からも多くの仲間からも引き離されて春画の上という、いかにも不似合いなところに転がっている卵に作者は哀しみを見いだしているのである。この時、七面鳥の卵の不安や孤独さは作者の姿を暗示しているように見える。また、春画は、作者が陥っている状況の背景にある恋愛やその経過を、戯画的に表現したものと考えられるだろう。自分自身を一步つき放した上で、戯画的にかなしみを歌っているところに③の歌の悲哀と、〈卵〉三首で行き着くかなしみがあるといえるのではないだろうか。〈卵〉三首を一連の作として捉えることで、②の「大きな手」に、ある種の恐怖を読み取るという先の解釈が保証されるし、生命の充実感が読み取れる①の歌も、連作の中においては③に至る導入に過ぎないということが知られるだろう。煌々とした卵を歌いながら、結局③のような悲哀の歌へと導かれるところにこそ作者の心境を読み取らなくてはならない

のではないだろうか。

「新生・序歌」の歌ではいろいろな所でこうした見方ができるように思う。例えば〈魚介三品〉の連にある歌、

鱧は大地の上は歩かねばそこにごろりところがりけり

もその一つである。この歌も従来は「新生」にふさわしい力のもつた歌として位置づけられることの多かつたものである。

鱧の有する大きさと、それがごろりところがるという重量感がまず力と結びつくし、第二句にある「大地」の語もそれを強調するように感じられるからだろう。そこでは、鱧の大きさは大地の大きさに匹敵する巨大で力強いものに見えてくる。大きく力強い歌として見られてきた所以である。前田夕暮は「鑑賞する私も亦ふかのやうにごろりと大地にころがされてゐるやうな気がする」といい、「ごろりところがりけり」という表現に解放感に近いものを読み取っているようである。

しかし、詠まれている歌の内容からすれば必ずしもそのようには読めないのではないだろうか。何といつても、人がごろりところがるということと、鱧がごろりところがるということが全く意味が異なる。人は休息を取るため大地にごろりところがるということがあるだろう。が、鱧が大地にごろりところがるのは休息を意味しているわけではない。死を意味しているのである。歌の上でも「鱧は大地の上は歩かねば」とその点が明らかに示されている。

にもかかわらず、まるで人がごろりと横になって休んでいるかのような表現を取っている。そこにこの歌の哀感があるのではないだろうか。大自然の中で何事でもないように放り出され

ている鱧の死は、大地が大きく雄大であればあるほど、鱧が巨大で重量感があればあるほど哀切であり、生命への喪失感が色濃いように思われる。「鱧は大地の上は歩かねば」という句にはそうした悲しみがよく表現されている。一見、生命力を感じさせる事物の大きさが、生命力の充実とは逆に哀切なものとして働いている好例といえるだろう。春画の上のところがつている卵に對する作者の心境と同様のものが、このごろりとところがつて放置されている鱧の死の中に見いだされるのではないだろうか。

### 三、へ大鴉

以上のことを念頭におくと、「新生・序歌」を代表するものとして、しばしばとりあげられ、「新生・序歌」の中で最も長い連を作っている「へ大鴉」の見方も大分変わってくるように思われる。「へ大鴉」の連作は以下の七首の歌からなっている。

- ①大鴉一羽渚に黙ふかしうしろにうごく漣の列
- ②大鴉一羽地に下り昼深しそれを眺めてまた一羽来し
- ③昼渚人し見えねば大鴉はつたりと雌を圧へぬるかも
- ④大鴉渚歩けど麗らなる波はそこまでとどかざりけり
- ⑤寂光の浜に群れある大鴉その真上にまた一羽来し
- ⑥一羽飛び二羽飛び三羽飛び四羽五羽飛び大鴉いちどに飛びにけるかも
- ⑦大空の下にしまし伏したり病鴉生きて飛び立つ最後に一羽

これらの歌々に對し、前田夕暮は、

寂光の浜の渚にゐる大鴉一羽なんとその面貌の逞しき、さな

から王者のやうな相貌を露呈して、厳かに押し黙つてゐる。いい、野上飛雲氏は、

あるがままの野性的な生命力の謳歌であり、大自然の中でその官能のかがやきである。また、中山礼治氏も、

無人の渚で内なる力に促されて自然無碍に行われる動物のふるまいに、作者は畏れと同時に敬虔な気持ちを感じたのである。「はつたりと」が大鴉を最も大きくしている。

と解釈しておられる。いずれも、野生の力強さに注目している点において見解を一にしているといえるだろう。確かに「へ大鴉」という題目自体、また、一首一首の歌で「大鴉」と明記している点など、鴉の大きさと力強さを強調した表現であることがわかる。詠まれている内容からみても、第二首「大鴉一羽地に下り昼深しそれを眺めてまた一羽来し」のように、静まり返つた中で大地と大鴉とを対照させて鴉の様子を詠んだり、第三首「昼渚人し見えねば大鴉はつたりと雌を圧へぬるかも」のように自然の中での野生の力を歌つたりして、大鴉の力が前面に押し出されている。第三首「昼渚人し見えねば」で示されているように、人の姿もなく、第一首「大鴉一羽渚に黙ふかし」のように鴉までも押し黙っている真昼の浜を、作者は第五首で「寂光の浜」、つまり、仏の住む世界と見ていることが知られる。「寂光の浜」であるからこそ、第一首、第四首にあるように、麗らかな漣がきらめき、大地と大鴉にある力は、静かに満ち渡っていると見えるだろう。「へ大鴉」の歌々から力の存在を読むのも尤もなことだと思われる。

しかし、〈大鴉〉の連がこのような形でのみ終始しているかという、そうばかりは言えない。第二首「大鴉一羽地に下り昼し深しそれを眺めてまた一羽来し」や第五首「寂光の浜に群れる大鴉その真上にまた一羽来し」が示しているように、第一首から第五首までの歌では大鴉が一羽、また一羽と集まって来るといふ形で詠まれている。そして、その大鴉が第六首「一羽飛び二羽飛び三羽飛び四羽五羽飛び大鴉いちに飛びにけるかも」と一つの群れとなつて飛び去ることによつて、一羽一羽の大鴉の力はまとまつた群れとして強調され、第一首からの歌の流れが集約されるという運びになっている。ところが、一連はここで終わらず、次の第七首においては、それまで全く表されていなかった側面が顕在化してくる。

大空の下にしまし伏したり病鴉生きて飛び立つ最後に一羽と詠まれる「病鴉」の一首である。すべての鴉が一度に飛び去つた後、第七首の病鴉は仲間から取り残された一羽として表現されている。「生きて飛び立つ最後に一羽」というのだから、病鴉も飛び立つだけの力を得たことは確かだろう。けれども、「病鴉」「最後に一羽」と表される病鴉の羽ばたきからは十二分の活力が蓄えられているとは考えにくい。ようやく「生きて飛び立つ」だけの力を得たといふものの、希望に満ちているといふよりも、むしろ孤独で悲壮ですらあるのではないだろうか。とくにこの一首で〈大鴉〉の連が締め括られる時、〈大鴉〉の連作全体が、単に明るく生命力を讚美しているだけでないことが知られるだろう。

ただ、兎に角も、病鴉は飛び立てたのだから、そこに力の存

在を認めるべきだという主張もあると思う。本稿もこの点を否定するつもりはない。が、そこに大鴉の孤独な側面や、悲壮な姿を見逃すべきではないと考えているのである。大きさ、力強さが強調されればされるほど、最終的に表れた病鴉の意味する孤独感や不安感が示唆するものは大きい。第一首から第六首までを承けた上で詠まれている「病鴉」の一首は、ただ一首でありながら、それまでの六首に拮抗して、作者の内なる心情が抑えきれずに吐露されたと解するべきであろう。第一首から第六首の総ての歌で「大鴉」といふ語を詠み込み大鴉の力強さを強調していることが、かえつて最後の一首の「病鴉」の存在を浮かび上がらせ、連作全体にも「病鴉」の蔭が強く及ぶような形になっている。

表面的には陽光の中で力強く歌われている大鴉にも、実は「病鴉」の歌に至る蔭の部分が潜んでいるのである。例えば、第一首から第六首の中に五回使われている「一羽」といふ語。大鴉の存在感を詠むばかりでなく、孤独な側面をも歌つていると知られよう。また、第一首の「大鴉一羽渚に黙ふかし」には、大鴉の沈鬱な側面が読み取れるし、第二首にある「昼深し」の語では、白日の明るさの底に暗鬱な面を覗かせている。このように、「大鴉」の一連は、一方で生命力の横溢を詠みながらも、他方で精神的に不安な側面をのぞかせることになり、作品として一面的でない奥行きを深さを持ち得ている。

「新生・序歌」の章は全般に大きいもの、力強いもの、明るいもので満ちていて、あたかも生まれ変わるための力で漲っているかのように詠まれている。〈力〉と題する歌、

煌煌と光りて動く山ひとつ押し傾けて来る力をも  
を「新生・序歌」の冒頭に置き、山をも押し傾けるような力を  
願っていることからは、作者もその辺を意図しているであろう  
ことは明らかである。けれども、少し子細に読めば、「新生・序  
歌」の歌々には力に対する讃歌の底流で、切なく哀しい歌声が  
脈々と息づいていると理解できるのではないだろうか。

#### 四、まとめ

「新生・序歌」について考察してきたこのような二つの側面  
に対して、総体として係わると考えられる論も見られなくはない。  
例えば長沢一作氏は、

『雲母集』の光明礼讃には、意地の悪いいかたになるが、  
どこかあらかじめ意図し、設定されたような形にはまった  
手法が感じられるのである。光明も法悦もあつたには違  
ないが、それは、それ以上に白秋のきらびやかな技巧によ  
つて支えられていたと思われてならない。

と述べておられるし、杜沢一郎氏は、  
結局、『雲母集』において白秋は、自己変革を志しはしたが、  
ついにそれを果たすことができず、ことばをやたらに励ま  
し、情緒性を切ろうとあがき、自己欺瞞にも似た演出を繰  
り返したにすぎなかったのではなかったか。

と論じておられる。これらの論考には、大上段に新生を歌う白  
秋の姿勢が実は、白秋の真実と異なるのだという解釈がなされ  
ていると考えられる。この点においては、「新生・序歌」の中に  
哀切な歌声を読み取ろうとする本稿と方向を同じくすると思わ

れる。が、両論ともに、『雲母集』が白秋の真実を語っていない  
が故に、作品として劣っていると見ているようである。

確かに白秋は『雀の卵』の「大序」で「恥を云ふと、私は『雲  
母集』で失敗した」と述べている。けれども、それはあくまで  
作者による一つの解釈として止めるべきではないだろうか。白  
秋は同じ「大序」で『雲母集』について、「活気活力のみで何も  
彼も無理に押し通さうとした」と述べている。が、先に述べて  
きたように『雲母集』の「新生・序歌」をみる限り、表面的な  
「活気活力」の裏側にありありとした悲哀の心情を読み取るこ  
とができるからである。それは、白秋が元来意図していたもの  
とは違っていたかもしれない。しかし、結果的に表現されてい  
る『雲母集』の世界は、「活気活力」の新生を求めようとする心  
と、その裏に隠蔽しようとしてもしきれない悲哀の心の相剋が  
実に鮮やかに歌われていると知られるだろう。「大鴉」の連作で  
も述べたように、それは作品にとつての傷になるどころか、作  
品全体に文学としての深みを与えていると言つてよいであらう。  
もし、『雲母集』が白秋のいうとおり「活気活力」だけの歌集で  
あつたとしたら、いかに浅薄で興行きのないものになつていた  
かと思われる。作者の意図を越えて表現されている悲哀や、不  
安、苦悩の姿、これこそ白秋における新生の真の姿、『雲母集』  
の真の姿として味わわれるべきものではないだろうか。そして  
『雲母集』の価値と魅力はこうしたところに見いだすべきでは  
ないかと考える。

「雲母集・余言」の中で、白秋はまた、

此の三崎生活の内容については作品が凡を証明すると思ふ

(略)。只初めは小児のやうに歓喜に燃えてゐる心が次第に四方鬱悶の苦しみとなり、遂に豁然として一脈の法悦味を感じ得たと信ずる。それ迄の道程は、本集に於いて初めより終まで殆正しい系統を追つて、順序よく採録されてある。

と述べ、『雲母集』に歓喜・鬱悶・法悦という道程があるといつてゐる。そして、『雲母集』を解釈する場合もまた、白秋の道筋に従つて論じられることが多く見られる。しかし、『雲母集』を全体として象徴する位置にあり、『雲母集』においては最終的に詠まれている「新生・序歌」の歌々にこれまで述べてきたやうな哀切な声調がみられること、さらに、それらが白秋の求めていた世界をも越えたところにあることを知つた今、『雲母集』にあるというこうした道筋についても、また再考の必要が生まれてくるのではないかと思われる。

注1 鈴木英夫氏も「序歌はむしろ終章なのである」(『北原白秋の思想』初出昭37・1)と述べてゐる。

2 「叙情の変質」(『短歌』昭53・9)。(c)は、第七章の「地面と野菜」から採られている。

3 「道徳の白秋・わが歌論」(昭56 青磁社)。岩間氏は、他に「来て見れば鯛ころがる無烟無みどりの葉をひるがへす」(『流離抄』)も同様の歌として挙げてゐる。

4 「北原白秋 人と作品」(昭44 清水書院)

5 「北原白秋論」(昭62 星雲社)

6 「アララギ」(大4・12)

7 「白秋論資料考」(昭49 新生社)

8 西本氏も③の歌に関して「しみじみと人生をかみしめる境涯的なものがこうしたところからきざしはじめるのであらう」(『前掲書』)と述べてお

られる。が、第二首と第三首の意味上の繋がり、さらに第一首との関わりなど(へ卯)三首を一連の作として解釈する見方は示されていない。

9 「白秋追憶」(昭23 健文社)

10 <魚介三品>も(へ卯)の連作と同様に、前半においては「水の面に光ひそまり昼深しぬつと海亀息吹きにたり」(日ざかりは巖を動かす海蛆もぱつたりと息をひそめるかも)と、生命力が静かに充実している様を詠みながら、第三首において哀切な歌へと導かれている。

11 注9に同じ。

12 「北原白秋 その三崎時代」(昭51 慶友社)

13 「北原白秋 歌とこころ」(昭56 有斐閣新書)

14 「黙ふかし」は、初出(ARS)大4・8)で「黙深し」と記されていた。沈黙の度合いが深いと解せよう。「黙深し」という語が一般的でないため、歌集では平仮名に改変されたと考えられる。

15 「新生・序歌」には、「昼深し」という語が三回用いられている。「黙深し」とともに「新生・序歌」を特色付けている。

16 この歌は、山を押し傾けてくるような力が自分にはないから、その力に對して詠嘆を持つて眺めている。つまり、力がないことを自覚している歌だという解釈もできる。しかし、本稿ではこのような形で力に對する意欲を示していると理解した。

17 「雲母集」と「あらたま」(『短歌』昭53・9)

18 「痛みを梶子として」(『短歌』昭60・7)

19 阿部正路氏は別の側面から「雲母集」について、「桐の花」から「雲母集」へ、そのあまりに人間的な苦悩の中の自己確立、それこそが「雲母集」の痛々しい煌々たる魅力なのである」(『国文学 解釈と鑑賞』昭60・12)と述べておられる。

本稿は筑波大学国語国文学会第十六回大会(平成四年九月十九日)に於ける口頭発表をもとにまとめたものです。平岡敏夫先生はじめ、ご教示を賜つた先生方に心より御礼申し上げます。

(東京成徳短期大学教授)